

「世界の記憶」キックオフシンポジウム

8/23、熊谷元一写真のユネスコ「世界の記憶」申請に向けたシンポジウムを開催しました。村では 2027 年夏の申請を目指し、様々な取組を進めます。

- ・記念講演 山下 美晴氏（舞鶴引揚記念館 館長補佐）
 - ・基調講演 金子 淳氏（桜美林大学リベラルアーツ学群 教授）
 - ・トーク コーディネーター 矢野 敬一氏（静岡大学教育学部 教授）
- 登壇者 山下 美晴氏、金子 淳氏、熊谷 秀樹（阿智村長）
- 世界の記憶：世界的に重要な記録物を保存・閲覧できるようにするためのユネスコによる登録制度



山下 美晴氏（舞鶴引揚記念館 館長補佐）

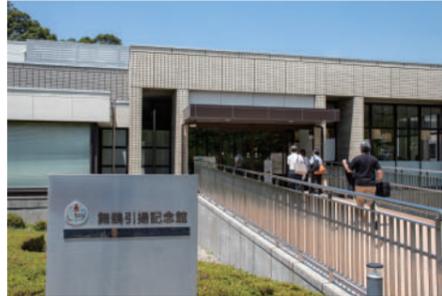
舞鶴引揚記念館と「世界の記憶」

1945~1953 年にかけて、引揚船のべ 346 隻が舞鶴港へと入港し、満州や旧ソ連から 66 万人の方が引き揚げて来ました。舞鶴市民は引き揚げてくる人たちに芋をふるまうなどして迎え入れた歴史があります。舞鶴引揚記念館はこうした歴史を残したいと 1988 年に設置されました。2012 年頃、ユネスコ「世界の記憶」の制度を知り、所蔵していたシベリア引揚に関する資料の、世界の記憶登録に挑戦することになりました。

「世界の記憶」に挑戦する意義

私たちは「世界の記憶」に登録できるとして挑戦を始めたのではなく、この引揚げの歴史を多くの人に知ってもらうことが体験者から託された舞鶴の使命であり、そのための登録挑戦と考えていました。ですから挑戦中の 2 年間は東京で市長が会見したり、東京タワーでの展示会など様々なプロモーションを行い、引揚げの歴史を広く知ってもらう事に取組みました。

この取組を通してできた財産は、町の力です。記念館は市民にとって当たり前の施設で、それまで特段の関心はありませんでした。しかし世界の記憶挑戦を通して「世界に発信できるものが舞鶴にある」「発信することで舞鶴が役割を果たせる」「自分もやれることをやろう」と市民の人がなったと思います。自主的に 40 を超える団体が応援団をつくり署名活動に取り組んでくださいました。行政も一緒に汗をかきました。この活動があったので「世界の記憶」登録決定の時にみんなで喜ぶことができました。



次世代へ歴史を継承する取組み

「世界の記憶」登録はゴールではありません。資料の保存と活用が重要で、今も資料の修復や調査に取り組んでいます。また国内巡回展を行ったり、小中学校の給食で引揚げに関するメニューを出したりもしています。

今後の目標はこの歴史を学んだ子どもたちが何らかの形で発信してくれることです。学んだことを地域の人や下の学年に教える取組を進めています。また中学生を始めとする 46 人の学生語り部も頑張ってくれています。来館者を案内したり、同世代となる修学旅行生に伝えたり、イベントに参加したりといった活動をしています。こうした活動が歴史の継承になると考えています。

熊谷元一写真「世界の記憶」提案者に聞きました！

矢野 敬一氏（静岡大学教育学部 教授・熊谷元一写真「世界の記憶」推進委員会 専門委員会委員長）



Q:熊谷元一の写真と出会ったきっかけを教えてください。

A:高校生の頃から写真や民俗学に関心があり、写真集『一年生』や『農村の婦人』を通じて熊谷元一という名前を知りました。都内で熊谷先生の講演案内を偶然見て、熊谷先生に連絡しました。先生から、「会う前に阿智村に一度行ってほしい」と言われ、1999 年 12 月に初めて阿智村を訪ね、2000 年 1 月に熊谷先生と直接お会いしました。

Q:初めて会った時の印象はどうでしたか？

A:まさに「レジェンドに会えた」という気持ちで、感動しました。事前に私を阿智村に行かせ、人々と会わせて上で熊谷先生に合わせるという流れは、熊谷先生が意図的に考えたものであったと思います。非常に緻密な段取りをされる方だと実感しました。記録写真を撮る際の周到さとも重なります。

Q:熊谷写真の魅力はどこにあると思いますか。

A:一枚の美しさよりも「組写真」のストーリー性にあります。例えば授業中の子ども様子を連続して撮影するこ



金子 淳氏

（桜美林大学リベラルアーツ学群 教授
熊谷元一写真「世界の記憶」推進委員会 委員）

ユネスコ「世界の記憶」の制度について説明いただくとともに、今後、阿智村が「世界の記憶」登録を目指す上で、また元一写真の活用を進める上で、どのような点を考える必要があるのかお話しいただきました。



阿智村への期待

①専門職員・応援組織（ヒト＝人的資源）

- ・行政：専門的な知識と技術を持つ専門職員の雇用が必須
- ・地域住民：「世界の記憶」を市民が自ら応援するための組織が必要

③データベースの拡充・普及（モノ＝物的資源・情報資源）

- ・写真のデータベース化はかなり進んでいる
- ・熊谷元一資料は写真だけでなく、童画など多岐にわたる
- ・これらの総合的なデジタル化を進め、データベースをより使いやすく整備していく必要性

②資金調達（カネ＝財務資源）

- 行政の財政状況の好転が見込めない以上、行政からの支援だけではなく、多方面にわたるファンドレイジングが求められる
- クラウドファンディングは一回限りの資金調達の方法としては優れている
- 支援者と長期的な関係を築くことが鍵。年会費を払うメンバーシップ、継続寄付制度の構築

④展示・活動場所（バ＝空間資源・環境資源）

- 熊谷元一写真の原資料（ネガ）や関連資料、パネル等を適切な環境で収めるための保存設備
- 展示し、市民が利用するための展示施設
- 市民組織の活動拠点となる場所

熊谷元一写真童画館を今後発展させるために

①ネガの保存環境整備

「低温・低湿」と「安定的な環境」が必要。博物館施設には保存のための国際基準が定められている。

②「自分たち」の力で

専門業者に全面委託すると、地域住民の声に直接触れないため、ありふれた提案になりがち。予算も外部の業者にいく。施設内部の知識・ノウハウの蓄積が進まない。

③「フィールド（現地）」へいざなう

熊谷元一写真の撮影地は村内の多岐にわたる。館内の写真展示にとどまることなく、現在の現実の風景に目を向け、実際に現地に足を伸ばしたくなるような仕掛けが必要。

とで、関心のある話には集中し、つまらない話にはすぐ飽きる姿が浮かび上がります。純粋な芸術写真ではなく「記録写真」として、社会のリアリティを伝える説得力が大きな魅力です。

Q:ユネスコ「世界の記憶」に向けた意義は何でしょうか。

A:大きく三つあります。第一にジェンダーの視点です。戦後農村における女性の解放運動を、自らの実践とともに記録した点は国際的意義があります。第二に資本主義の高度化を一農村で 70 年近く定点観測したこと。都市ではなく農村で生活変化を長期的に撮影した事例は希少です。第三に戦後の子どもたちの笑顔です。戦争が続く現代において、平和の尊さを普遍的に訴える力を持っています。

Q:矢野先生はなぜ熊谷元一写真を世界の記憶に登録しようと思ったのですか？

A:2024 年 1 月にたまたま「世界の記憶」の制度を知り、文部科学省のHP等で調べました。これまでに登録された記録物を見て、熊谷元一写真も登録に値する、と思いました。

Q:登録に向けた課題は何でしょうか。

A:最大の課題は資料の保存体制です。現状ではネガや資料の保管環境が不十分で登録の際に不利になります。この制度は「失われかねない記録の保存」が大前提なので、行政による財政支援や保存環境の整備が不可欠です。